

中日両国における教育交流の歴史的回顧

王 玉 珊*

目 次

1. はじめに
2. 中日両国における教育交流の発展状況
 - 2-1 両国近代教育体制の創始段階
 - 2-2 両国における教育の全面発展、参考し合う段階
 - 2-3 両国教育における交流の閑散期
 - 2-4 両国における教育交流が悪化段階
 - 2-5 両国教育交流の赫赫たる段階
3. 中日両国教育交流の歴史から得た啓示
 - 3-1 真似と創造する関係を処理
 - 3-2 教育近代化の過程
4. 結びに代えて
—政治が教育への影響から脱却—

1. はじめに

教育交流は教育の進歩と発展を促進する重要な道である。特に、近代中国の教育が伝統型から現代型まで経てきた過程は中国が列強諸国に学び、絶えず列強諸国の例を学んだ結果と断言してもよい。1840年以來、西洋列強が当時の中国の封建王朝に侵入しつつあることにしたがって、中華民族の亡国滅亡の危機が徐々に深刻化した。各界の有識者は自らを救う道を探し始めた。その中、教育振興と人材育成は広範囲に認められた。そこで、そ

の時の中国は相次いで英、仏、日、独、米、ソ連などの国々からに学び、それらの国のさまざまな学校教材等を翻訳した。役人をそれらの国に派遣し、教育現状を視察した上で、各々の国の教育制度を真似して、中国の近代教育体制を確立していった。各国の教員、研究者を雇い、有名な学者に中国で講義をさせた。留学生を各国に派遣した。以上のことは中国が教育の面で世界各国と交流する過程の一つといえる。この過程を通じて、中国の古い教育体制が徐々に徐かれて、資本主義の持っている特性を近代的教育体制に導入して一歩一歩確立した。中国教育の近代化の変化がようやく訪れて現実の運びとなった。

近代では教育の面において、中国との交流があった国の中で、日本との関係は最も密接で、かつ複雑である。中日両国は一衣帯水の隣国で、交流の歴史も長い。その中、教育交流の地位がかなり重要な地位を占めている。古代では、中国は文明・文化が大きな優位性を持っており、経済・文化・政治・教育などの面で日本に大きな影響を与えた。中国の進んでいた文化が日本の文字文化の発展を促進した。そして、「私学」という重要な教育形式を日本で形成させた。それでも、歴史が絶えず進んでいる中で、清の末に至っても、中国は長い封建社会文化に縛られ、「科举制度」

*中国：東北財経大学副教授

が実施されていた。この封建社会の中で中国教育の発展が行止りの状態になった。

さまざまな面で中国に学んだ日本は一早く西洋文明を受け入れ、その影響で大いに変化して、アジアで近代化が始まった。昔、日本は中国に学んだが、近代では中国は日本に学んできた。中国の有識者たちは西洋に学ぶ時期を逃し、発展が遅れたことに後悔している。また、日本が近代化によって、文化や経済が発展して日本と中国の地位の変化に対しても非常に残念である。その当時、日本も中国が西洋文明を学ぶ時の乗り換え時期であった。その後中国の学者たちは、日本をモデルにして、日本の良い経験を吸収すれば、欧米の近代化を回り道せず、倍の成果が得られると思っていた。それ故、教育の面で日本との交流は中国が西洋文明を学ぶ重要なルートである。

2. 中日両国における教育交流の発展状況

2-1 両国近代教育体制の創始段階

16世紀初期、アジアまでの新たな航路がヨーロッパ各国に発見され、欧亜の間での取引活動がより頻繁的になってきた。その当時、西洋諸国の宣教師たちが中国に来て、宣教を行った。教育の面という、「西学東漸」が挙げられる。イタリアの宣教師が中国に神学以外に数学・天文・地理などに関する書籍を中国に持ってきた。その後、西洋諸国の宣教師たちが天文暦法・医学・水利・生理・音楽などの知識を中国に伝えた。一方、その当時の中国の官学教育が有名無実になってしまい、教育内容がすべて不統一あり、科擧での不正行為が珍しくない。これらの悪弊が中国教育の発展の妨げになるマイナス要素である。このような時期に、中国に伝わった新たな要素が中国の有識者に大きな影響を与え、

彼らは教育の内容、目標、方法などについて斬新的な見解を提出した。しかし、中国の伝統文化にある守旧思想が変化することがむずかしく、西洋宣教活動はあまり効果がなかった。そこで、中国にきた宣教師たちが学校を設立して、西洋文化を宣伝した。それを宣教する新たな方法にした。その中、有名なものという、香港の英華書院・モリソン学堂などが挙げられる。1842年アヘン戦争で敗戦した中国で、宣教師たちは不平等条約の中で、より多くの学校が設立された。

ところで、同時期の日本は中国と大体同じ歴史背景で、疲弊社会の状態であった。このような日本も、西洋思想からの衝撃も強くて、殖民になるおそれがある。中国と同様な文化衝撃に直面するとき、日本政府は和民族の精神に基づいて、西洋の科学技術を中心として、積極的に外来文化を吸収した。西洋の進んでいる教育体制を学び、教育界で根本的な改革を始め、「和魂洋才」もその時代の特徴であった。その本質は中国の洋務運動時期の「中学為体、西学為用」によく似ている。この政策の下で、日本教育が伝統文化を発展させ、国や企業や職務等に忠誠を十分に重視することは、東方儒学の特色があり、選択的に東方諸国が基礎や訓練を重視する伝統を守っている。自発的に民族自身のオリジナルな文化を伝承すると同時に、西洋文化の価値観を学び、個性を尊び、国民の文化修養を絶えず向上させた。それ故、仕事に熱心し、仕事をしっかりし、敢然と取り組む精神を育成して、日本の近代化の成功を促成した。

この時期の中国の教会学校がレベルの低い学校であるが、設けられた数学、天文、地理などの講座は中国の古い教育形式と違っている。特に女子学校の開校は中国の教育に大きな衝撃を与えた。中国の封建的な教育に資本主義の要素を挿入した。しかし、その成果は、

中国の何千年の歴史の影響により、沿海エリアに限られた。同じ時機、近代化に向けた行動に直面した。

中日両国は民族文化の伝承と外来文化の吸収の過程で、よく似ている観点であったが、大きな差があった。中国は相変わらず黙ったままであるが、日本は近代化に向けて世界を驚かせる程の成果をあげた。

2-2 両国における教育の全面発展、参考し合う段階

日本は明治維新の成功をきっかけとして、世界強国となり、日本教育も近代化を実現しつつあるが、中国の洋務運動は度重なる困難に面している。日本が西洋文化の衝撃に面したときの考え方及びその成果は中国を日本に羨ましがらせると同時に、学ぶ心理動力を与えた。日本は全面的に西洋のことを学び、是正が行き過ぎる態度で、中国の儒学を求めず、直接に西洋文明を受け入れ、西洋文明なら全てを受け入れた。日本は1872年「学制令」を制定し、西洋現代教育体制を真似して、近代学制を作り、小学から大学まで、理論から実用技術までの現代教育体制を完成した。そして、数多くの学生を英、仏に派遣して、西洋文明をしっかりと学ばせた。日本のことを学ぶ課程で、中国の各派の思想も変わってきた。単の技術だけの導入から「中体西用」に変わり、「中体」を脅かさない前提に基づいて、西洋学を導入する。その上、西洋の教育体制に従って、中国らしい京師同文館、福州船政学堂などの数多くの「洋務学堂」が開校された。しかし、中国の社会背景に縛られ、このような学堂がばらばらであるので、まだ全国的な統一性をもっている学制とはいえない。

中国の維新派は日本の明治維新の影響を受けて、洋務派の得た成果に満足しない。その

上、不平等条約が次々と締結されて、守旧派の勢力が弱くなった。維新派はこの良い隙間を生かして、「百日維新」を始めた。維新派は全面的に西洋学を学び、科挙を改革し、近代学制を作ることを改革思想として確立した。このほか、ある程度で女子教育を提唱した。このような維新思想にしたがって、維新派は学校、学会を創立し、新聞や雑誌を発行した。「百日維新」の主な内容は京師大学堂の創立、八股文の廃止、科挙制の事実上の廃止、新学校制度の導入などを含めている。康勇為、梁啓超、嚴復などの有識者が提出した外国の教育思想認められた。「百日維新」は守旧派のせい、失敗したが、民間の力が強くなると同時に、維新派の日本を学ぶ意識がだんだん強くなることは、清政府に大きな影響を与え、清政府の封建官僚たちでも日本及び日本の西洋を学ぶ態度を自発的に学び始めた。したがって、清末の新政が始まった。1902年、中国で初めて中央政府の名義で全国的な学制を宣言した。その後、光緒帝は1905年9月2日に科挙制度を廃止することを宣言した。日本の経験を参考して、女子教育、師範教育、事業教育及び軍事教育を重視した。しかし、この学制はあわてて作られたものであるから、不足な点が多いので、1904年、清政府はまた「癸卯学制」を宣言し、全国で広がった。この学制は封建的な特性があり、洋務運動の「中学為体、西学為用」を宗旨とするが、中国政府がしっかりと検討したうえ、世界に視野を広げ、全面的に日本の学制を参考した。古くからの科挙制度より長足の進歩を遂げた。

中国教育改革の発展は学生を主体とする「留学教育」を促進した。洋務運動時期、洋務派が提案して、政府が費用を提供して、詹天佑などの30名の児童をアメリカに留学させた。中国留学教育の幕を開けた。続いては、

数多くの学生をヨーロッパに派遣し、西洋の進んだ科学技術を学ばせた。清末の新政は1906年前後の日本留学ブームの形成を促進した。1908年、アメリカの「賠償金を返還し、教育を促進する」の政策を実施してから、アメリカ留学ブームも形成された¹⁾。帰国した留学生たちは新政府の各界で働き、外国から習得した進んだ科学技術が中国の発展を促進し、新式の学校の教師陣を完備し、技術人材育成を豊富にさせ、資本主義思想を広げ、中国で資本主義が芽生えてきた。

要するに、この時期の教育の発展は清政府が自分と西洋諸国及び隣国の日本の間での差を自覚してから、日本の教育体制をモデルとして進んだ過程である。この過程で、日本は東洋の強国として、西洋の科学技術を取り入れた西洋化した日本になり、中国教育の発展に重要な影響を与えた。具体的にいうと、次のようなことである。洋務運動時期、中国は日本が西洋諸国を学ぶことの真似、「百日維新」時期に至って、日本の教育強国に対する認識、清末新政の時期、宣言した学制が形式でも内容でも開校宗旨でも日本の明治維新時代の学制によく似ている。このほかに、日清戦争の後、中国政府は日本が強くなった原因を究明するため、数多くの留学生と役人を日本に視察させた。以上のことはいずれも日本が西洋に学び、教育で強くなった東洋諸国の手本になることを示した²⁾。

2-3 両国教育における交流の閑散期

辛亥革命の後、新文化運動及び五四運動の成功は、中国封建教育の資本主義改造に新たなきっかけを作った。第一回世界大戦で欧米諸国が東洋のことに口を出さずに、中国がほしいままに教育を発展したきっかけがあった。この時期の中国政府は数多くの官吏や留学生を日本に派遣し、従来の日本の教育思

想を単に吸収する局面を変え、日本教育発展の国際動向に焦点を合わせて考察した。その上、既に暴露した教育問題を解決するため、日本の女子教育、職業教育などの問題を主に究明した。留学生の面では、アメリカから帰国した留学生は日本から帰国した留学生より優秀であった。それ故、日本から帰国した留学生の地位が急に変わった。国内の状況が悪くなり、日本の大学が学生の研究能力教育できず、日本への留学生の数が多すぎなどの原因で、中国政府は留学政策を変え、徐々に日本への留学生の数を減らし、より多くの学生を欧米に留学させた。そして、海外視察については、単に日本のみ視察するのは不十分なことに気づき、有識者たちは欧米に視野を広げた。その中、黄炎培は同時に日本とアメリカを視察して、比較しながら日米両国の経験を吸収する上に、中国国内の職業教育改革を推進した³⁾。

この時期の最も重要な実例という、民国時代の新学制の誕生と制定する過程があげられる。清政府はまず官吏を日本に派遣し、日本の専門家と学制の改革問題について検討した。しかし、日本の学制はまだ改革しないままで、役に立てるものがなかったのである。代表団は帰国してから、元の学制を大きく変えないということを原則と確立した。それでも、民間教育がアメリカに学ぶ勢いがあり、全国教育連合会と教育部は新学制の制定に関する検討を行った。検討する過程で、西洋に学ぶか。それとも、東洋に学ぶかという問題があった。つまり、中学校は三三制にするかまたは四二、二四制にするかの問題であった。また、小学校六年、七年の違い及び中学校の教育と職業教育との優劣についても焦点を合わせた。

このような検討は次のようなことが反映された。つまり、このときの中国学制改革の傾

向は外国の経験の総合選択と融合、また中国の国情を参考しながらそれらの経験を分析して生かすことである。そして、このようなアメリカの学制を学ぶ傾向は、その後の新たな学制を作る過程で、新たな学制の指導思想と学制システムに現れている。

この時期の中国教育の発展の特徴はまだ外来思想を絶えず導入するのである。しかし、清末の単に日本を学ぶ傾向が変わり、両国の教育交流が閑散になり、中国も外国の経験に対して、多方向選択、交差融合の学習と創新の段階に入った。日本は東洋の唯一の強国の時代が終わった。その地位も西洋化した日本と西洋も同様、中国の教育界に選ばれる対象になった。日本は西洋諸国と競争する過程で、劣位になったが、そのときの中国の教育にも重要な影響を与えた。

2-4 両国における教育交流が悪化段階

中日両国の戦争は両国の教育交流の発展を妨げた。両国教育の交流は少なくなり、関係も悪くなった。戦争が終わった後で、中国教育の発展が斬新な段階に入った。中国建国初期、まずソ連からの影響を受け、全てソ連式に以降した。しかし、中ソ関係が悪くなり、ソ米冷戦時期では中米関係がだんだん良くなり、中国教育界が再び教育発展の大方向を捕まえ、全面的にソ連を学ぶことを変更して、全世界に視野を広げた。この時期の中国は辛亥革命以来の成果に基づいて、全面的に世界各国の経験を参考した。その中の成果を吸収し、悪いものを捨てた。そして、それと同時に中国の国情に従って、何度も改革してから、中国の特色がある社会主義教育体制を作り上げ、中国伝統文化に基づき、オリジナルな教育文化が形成した。世界教育の発展につれて、完備していた⁴⁾。

戦争時期、両国の関係が悪くなり、両国の

政治関係の影響で、この時期では、中日両国政府間の教育交流がまったくなくなった。教育関係も植民地主義教育と反植民地主義教育の闘争にも現れている。しかし、喜ばしいことは、両国間の民間の教育交流が戦争間においても中止しなかった。戦争の強圧で息苦しかったが、継続した。

ところで、鳩山一郎内閣時期、日本政府は中国への政策がすこし緩和した。そのとき、中日間の貿易がある程度で拡大した。教育、農業、衛生などにも及んでいる。結局、戦後の中日交流の初めての高潮になった。鳩山内閣時期、300 ぐらいの代表団、3600 人ぐらいの中日両国の団員が訪問しあい、中日両国の教育関係の回復のための基礎をより固くさせた⁵⁾。

2-5 両国教育交流の赫赫たる段階

1972 年中日国交が回復した後、中日教育の交流は苦難の時期を経て、やっと新たな幕を開けた。中日国交正常化が深くなることにつれて、絶えず発展している。両国政府は人民の努力の元で、中日関係が各方面で長足な発展を遂げた。特に教育文化方面での発展が最も著しい。中日両国の教育代表団が訪問しあい、中日の大学学長会議の開催及び両国の留学生の数も激増とした。中日国交正常化以来、初めての規模の大きい教育交流活動は中国教育部が北京大学で開いた日本教師養成クラスを作ったことである。このクラスの教師陣の団長は日本文部省が派遣した東京外国語大学教授坂田雪子である。このクラスは中国の各大学の約一万名の教師を育成して、中国の日本語教育の発展を直接に促進した。中日両国間の交流の発展の基礎を固めた⁶⁾。1985 年 4 月 30 日から 5 月 2 日まで、第一回の中日両国の大学学長会議は北京の香山飯店で開かれ、翌年の 10 月 28 日から 30 日まで

東京総合図書館で第二回中日大学学長会議が開かれた。それから、留学生を派遣しあう活動が活発になってきた。1980年から1990年まで、中国は日本人の留学生を6000人余り受け入れた。日本に留学した中国人の学生はより多い。1990年5月まですでに二万人に達し、日本での留学生総人数の40パーセントとなっている⁷⁾。

このほかには、90年代以来、歴史的側面では、中日両国は大学教育制度と大学教育管理などの面では類似点がたくさんあり、両国が大学教育改革中では大学の自主権を上げる特徴が現れている。そして、この過程では、すべての政策の実施は政府からの支持と指導に頼ったのである。大学の法人化と学生の自主募集を実現した。中日両国の高等教育改革で現れている類似点も現代中日両国間の教育文化交流からの影響である。

3. 中日両国教育交流の歴史から得た啓示

教育交流は教育の進歩と発展の主な動力である。特に、今は情報化が早く更新して、交流する時期である。各国の間の教育交流は今までのどの時代でもより深く、広く、取って代わることができない。このような新たな形勢では教育交流をよりよく発展させるため、私たちは近代以来の中日間の教育交流を真面目に反省した上で、この過程で長所と短所をまとめるべきである。これも現実の要求でもあり、今日歴史を回顧する原因でもある。

3-1 真似と創造する関係を処理

教育交流は各国の進んだ教育思想や教育制度や教育政策を習い、理解した上、その精華部分を吸収し、モデルとする。最後、中国の教育の発展の有利な要素になる。これはどの国またはどの民族でも教育交流をする出発点

と終点である。しかし、教育発展の歴史を顧みると、他国の教育発展の経験を真似することは成功したものもあり、失敗したものもある。中日両国が西洋に学ぶ違う過程はそれをよく表している。19世紀中期以来、同じく鎖国した二つの封建王朝はほぼ同時に西洋諸国に侵略され、資本主義の威嚇に面し、亡国滅種の境地に落ちた。それを同時に、両国とも西洋文明を学び、民族を救う道を選んだ。明治維新の過程で、日本は教育改革を人材育成と現代化の実現の主な手立てとした。西洋新式学校の開校、留学生の派遣、西洋人教師の雇い、西洋の教科書を翻訳するなどの手法を採用した。これらの手法は愚かで無知な状態を変え、文明開化を推進し、アジアで最も早く近代発展を遂げた国になった。清王朝の統治者たちも教育で西洋学を学び、新式人材を育成するテストをした。洋務運動時期、中国も新式学校の開校、西洋人教師の雇い、西洋の教科書の翻訳、留学生の派遣などの手法も採用した。しかし、その改革の結果は日本とまったく違った。同じ時代的背景であり、国情が良く似ている中日両国はほぼ同じ時機で西洋の教育改革を学び始めた。却って、まったく違った発展道となった。このような結果となった主な要因の一つは、中国が西洋に学ぶ過程で、真似すぎて、創新しなかったのである。しかし、日本は他国の経験を参考として、最も大きな特徴は他国の経験と長所を吸収し、日本化にしてから、自身発展を促進する原動力となる。明治維新の過程で、日本は西洋の教育モデル、教育思想と教育理念に対して、大胆に改革して、変通して、それにより適応性と目的性を与えて、日本の国情によく似合わせた。そして、文明開化と非近代的な状態を変えた。それ故、日本の近代化の改革が中国に比べて、より早く、深くなった⁸⁾。

3-2 教育近代化の過程

ところで、教育近代化の過程では、この問題はずっと中国の発展を妨害している。1904年、清政府は「癸卯学制」を宣言して、形式から内容まで、内容から精神まで、ほとんど日本学制のコピーである。その中では、中国の国情に従っての変化が見つからなかった。ただ、単に真似と導入は不十分ことであり、より重要なのは改良、創作、中国化なのである。こうすることこそ、良い教育経験と制度を中国で芽生えさせる。

21世紀の今日、中国の教育の発展も同じ問題に面している。中国の教育は絶えず発展を遂げるため、国際環境と離れられない。他国の進んだ体制と経験を勉強するのは発展を遂げるための原動力である。しかし、中国は盲目と焦りを克服し、自分のことを十分に理解したうえ、他国の経験を詳しく調べ、参考すべきである。導入と吸収すると同時に、選択と改良もかなり重要なことである。広い範囲で吸収した上、中国特色がある教育体制を作るべきである。

4. 結びに代えて—政治が教育への影響から脱却—

教育交流は国と国の交流の一種類であり、政治関係からの影響が大きい。両国の政治の関係がよければ、その両国間の文化と教育交流も頻繁になる。その反面、冷たい政治関係も両国間の教育交流に悪い影響を与えている。

ここで、強調したいのは教育交流が民族間と各国間の教育経験、教育知恵の交換と分かち合う過程である。この過程では、各国に対する教育の発展と文化進歩には重要な影響を与えている。そのため、進んだ教育理念、教育思想と教育実践に対して、政治関係とイ

デオロギーからの影響を最小化にすべきである。教育価値の立場に立って、科学的に評判すべきである。教育思想、教育実践の分かち合いもできるだけ、政治からの影響から脱却し、それを国と国、エリアとエリア、民族と民族の制限を越え、全世界教育の発展のため、役割を果たさなければならない。

喜ばしいことに、近代時期の中日両国間の教育交流は政治の制限を越え、文化交流に対しては、比較的成熟な方式で対応した。新中国が建国する初期、両国が文化と教育の交流においては、間違えたところがあった。そのときの若い新中国は西洋の資本主義諸国に見放されたので、ソ連が唯一の外交対象となった。そこで、中国はソ連をモデルにして、中国の教育体制を作り、ソ連の教科書を訳し、ソ連の専門家に中国の大学の教育と研究を指導させ、ソ連に留学生を派遣するなど、この時期の教育は閉鎖的な発展ルートが中国の教育文化事業に大きなマイナスの影響を与えた。全世界諸国一緒、教育思想と教育理論に関する新成果を分かち合い、諸国教育の発展を促進する時期であったが、中国が当時の閉鎖のせいで巨大な代償を払った。

これでも分かるように、教育交流は世界各国の進歩と発展の重要なルートである。よって、中国教育は視野を世界に広げている今、政治制度とイデオロギーが教育乃至文化交流に与えた影響と縛りから脱却して、民族教育の発展と進歩のニーズに応じて、より開放的な態度と度胸で世界各国の教育成果を吸収すべきである。その教育成果を我々の要望に満足させ、我々の発展を促進させるため、より重要な役割を果たすべきである。

[注]

1) 呂順長「清末中日教育交流の研究」博士論

- 文 2007年 126頁 参照
- 2) 呂順長「清末中日教育交流の研究」博士論文 2007年 138頁 参照
 - 3) 宗秋栄「中日交流と歴史問題討論会、つまり中日教育交流座談会総述」『教育研究』2004年 12期 35頁 参照
 - 4) 田桓「中日関係の過去と未来を論じる」『日本学刊』1985年 4月 35頁 参照
 - 5) 祝樹春「鳩山改革対華政策と中日関係の緩和」『東北亜論壇』1995年 3月 22頁 参照
 - 6) 趙霞『国交正常化以後の中日教育交流についての研究』博士論文 2007年 89頁 参照
 - 7) 趙霞『国交正常化以後の中日教育交流についての研究』博士論文 2007年 109頁 参照
 - 8) 陳書智「近代中日教育交流の回顧と思考」『中国冶金教育』2007年 2月 45頁 参照

Retrospect of the Educational Exchange between Japan and China

WANG Yushan*

Dongbei University of Finance and Economics

Abstract

Education exchange is an important approach to promoting education progress and development, especially education in China in modern times. It can be said without exaggeration that the development of education in China in modern times, from traditional to modern, is the result of China's learning from other strong countries and exchanges with them. Among these countries which implement education exchange with China, Japan is the country with the closest and the most complicated relationship with China. Adjacent to Japan across the sea, China has a long history of education exchange with it, which can be divided into five phases. The first phase is the beginning phase of education system of two countries in modern times; the second phase is the phase of overall development and learning from each other; the third phase is the phase without special events; the fourth phase is the phase with a deteriorating relationship; and the fifth phase revitalizes the education exchange between the two countries. The article expounds the five phases and analyzes the implications from the education exchange history between the two countries in the last part, expecting to cast a shaft of enlightenment on China in terms of the education exchange with other countries in the future.